

モンゴメリの日記 (十一)

『——ユーアン・スチュアートの誕生——』

竹内 素子・伊澤 佑子・藤掛 由実子*

前回訳出したように、モンゴメリは第二子ヒュー・アレグザンダーを死産で失った。しかし、自分自身が一人っ子として育ったモンゴメリは、チェスターが一人っ子となることを望ましいと思わなかった。チェスターに弟が妹が欲しいという思いと、身ごもっても子どもを再び失うのではないかという恐れと、今まで以上に高齢出産の危険性を抱えることになる不安との間でモンゴメリは揺れ動いている。この日記には、早々に妊娠の徴候に気づきながら、その時々に来る感情に支配されるモンゴメリの姿が比較的正直に綴られていると思われる。

前回も書いたことだが、第二子の出産を直前にした一九一四年八月、第一次世界大戦が勃発した。この戦争は、ヨーロッパの多くの国を巻き込み、大規模に広範に繰り広げられた。モンゴメリは、この戦争の新聞報道に、信じられないほど心を砕き、ニュースの行間から具体的に鮮明な映像を思い描いては、打ちひしがれていた。この戦争に、モンゴメリは、今までの平穏な日常を完全に打ち壊し人間世界を脅かすものを感じ取っていたと思われる。

実際、この戦争は、英連邦の一員であったカナダに、大きな影響を及ぼした。カナダ政府は、志願兵を募集し、英国軍の一部として、ヨーロッパの戦場に送り出した。フランスの国境では、フランス軍がドイツ軍と激しい戦闘を繰り広げていた。その戦況を、モンゴメリは毎日毎日、固唾を飲んで見守り、新聞が

来たといつて神経をすり減らし、新聞が来ないといつても神経をすり減らしていた。そのような折、腹違いの弟カールが従軍を志願したのを知って、モンゴメリは複雑な思いで、その事実を書き記している。志願したカールの心意気に身内としての誇らしさを感じつつ、幼いチェスターが従軍するような年齢でないことに安堵している。そして同時に、間違はなく、安堵している自分に後ろめたさも感じている。やがて、リースクデールの教会員の家庭からも若者たちが従軍し、戦死者も出すことになった。その若者たちの死を悼んで、モンゴメリは『虹の谷』(邦題『虹の谷のアン』)を書くことになる。

それにもかかわらず、モンゴメリの一生を考えると、この時期は、作家としても母としても牧師夫人としても、短いながらも最も幸せな時期だったと言える。ページ社に対する不信任感が顕在化するのは、一九一六年の詩集と『アンの夢の家』の出版先を選ぶ過程において、他の出版社がページ社の不誠実さをおおせたことがきっかけだった。^{註1} 一九一七年末に、モンゴメリが祖母の死後、実家代わりに頼りにしていたパーク・コーナーのジョン伯父が死亡した。

さらに悪いことに、翌年、パーク・コーナーの跡取り息子であるジョージ・キャムベルが、年老いた母親と幼い子どもを残してスペイン風邪で死亡した。しかしモンゴメリにとって最も痛手となったことは、最愛の友人であった従妹フレッドを一九一九年一月二五日に肺炎で失ったことだった。^{註2} さらに、同年

* 宮城学院女子大学
東北大学非常勤

五月末にユーアンは、精神に変調を来たし^{註1}、好不調の波はあったものの、その病状は一生快復することはなく、この後モンゴメリは死ぬまで、ユーアンの病に悩まされ続けることになる。したがって、この時期の日記からは、多少の浮き沈みはあったにせよ、結婚し新たな土地で自分自身の人生を築き、歩み始めているモンゴメリの姿が伺えるだろう。

註1 伊澤・藤掛・竹内(二〇〇〇)

註2 竹内・伊澤・藤掛(二〇〇三)

註3 ユーアンは、一九〇六年、キヤウエンデイスの教会の牧師を辞して、エジンバラ大学神学部に留学した。その時に、このような精神状態に陥ったことが、ユーアンの手紙を記したモンゴメリの日記から分かる。さらに、後になつて、ユーアンがプリンス・オブ・ウェールズ大學生在学中に、すでに同様の精神状態に陥ったことがあると、ユーアンから聞かされたことが日記に記されている。

翻訳上の約束

傍点を打ってある箇所は、原書ではイタリック体で表されている。出版物は、『』で表した。

プリンス・エドワード島は、PEI および、P. E. Island と記されているが、ここではプリンス・エドワード島で統一した。

一九一五年一月一日 金曜日

オンタリオ州、リースクエール、牧師館

(前略)

クリスマス^①の翌日、ケイト^②から、下の異母弟カールが、第二師団に入るという手紙をもらった。ケイトはこのことを、まるでカールがコンサートにでも行くかのように、他人事のように無造作に書いて寄越した。手紙の文面から分か

るけど、ケイトは本当に薄情で感情というものが無いのだろうか？ あの母親の娘ならありそうなこと。でも、父さんの子どもでもあるのだから、そんなことがあるだろうか。カールには会ったことがない。可哀想な子。ケイトの思いやりのない文を読んでいううちに、突然、涙が溢れてきた。父さんの息子が我が大英帝国のお役に立とうとしている。「わたしだったらしたであろうことを、あの人はやりに行く。／ダグラスの娘がもし息子であつたならば。」^②

わたしはすぐにカールに手紙を書いて胸の内を打ち明けた。もしカールに父さんと似たところがあつたなら、その思いは伝わるだろう。全くの母親似で、ただ変化と冒険を求めて戦争に行くのだつたら——そんなこと、神がお許しになりませんように——あの手紙は何の意味もないだろう。

ずっと昔、子どもだった頃、メティスの反乱^③が当時「北西部」と呼ばれていた地域で起こったのを覚えていて。プリンス・アルバートは戦場となつて、外部との通信が何ヶ月も途絶えた。その間中、父さんから何の連絡も無くて、父さんが生きているか死んでいるかも不明だった。わたしは幼なすぎて状況がよく分からなかったけれど、父さんからやつと手紙が着いた時、ああ、どんなに嬉しかったことか。一人の密使がどうにか反乱軍の目をかいくぐつて、プリンス・アルバートに潜入し、再び密かに出てきた時、父さんはその密使に手紙を託した。父さんは志願兵としてバトウーシュにいた。戦線には実際加わらなかったけれど。わたしは今晩まで何年もの間、このことを思い出しもしなかった。今や、父さんの息子が戦争に行く。この戦争に較べたら、リエルの反乱なんて、ベスピオス火山とマッチの火を較べるようなもの。

チェスターが従軍するような年齢ではないことを神に感謝する——そして恥ずかしさで身が縮み、感謝の言葉は唇の上で消える。なぜなら、それって他の女の息子がわたしの息子の代わりに戦争に赴くことを神に感謝しているのと同じではないの？ 「血を流すこと無しには、罪の許しはあり得ないのです。」^④血を流すこと無しにはどんなことも起こり得ない！ あらゆるものが犠牲によって贖わなければならない、ように思える。人類は、血の跡を残しながら、苦勞して一步一步登つて来た。そして今や、大量の血を流さなければならぬ！ ステラが最近書いて寄越したけど、ステラが会った誰かが「今度の戦争は、キリストの磔^{はりつけ}以来最大の悲劇だ。」と言った、と。その報酬として、この戦争に見合うような、ある素晴らしい祝福が与えられるのだろうか？ この世界を震撼させている、この苦悶は、何か素晴らしい新しい世紀を産み落とすための苦し

みなのだろうか。それとも、これはみんな「二京の太陽の皓々たる光の中の／不毛な蟻の戦い」なのだろうか。⁽⁵⁾

私達は、蟻塚を壊し、その半分を殺すような災難を気軽に考えがちだ。この宇宙を動かしている神は、私達のことを蟻よりも大事な存在と考えているのだろうか？ 私達はそう思っているに違いない。さなければ、私達は生きていけない。

誰にとっても、すべてが以前とすっかり同じとはいかないだろう。“と、この前、ロンドン発行の新聞で読んだ。ああ、恐いくらい当たってる！ 以前の秩序は失われてしまった。わたしたちの人生は、あの八月の運命の日以前の状態に戻ることは決してない。

一九一五年一月一七日 日曜日

オンタリオ州、リースクデール、牧師館

今日の午後はとても寂しかった。ユーアンはいつものように出かけて、ビリー・サンデー⁽⁶⁾風の地獄の責め苦についての脅し文句の方が明らかにずっと好ましいと思うような、鈍感でももの分らないゼファー⁽⁷⁾の人達に、論理的で説得力のある、もったいなくとも善い説教をしていた。リリーはチェスターを自分の家に連れて行った。こういう農場詣では、チェスターみたいな幼い子には楽しみ。可哀想な坊や、農場で生まれ育って、緑あふれる果樹園やクローバー畑や大きくて薄暗くてよい匂いのする納屋で、当たり前のようにふざけたり、はしゃいだりすることができないなんて、残念。まあ、これから他のことで埋め合わせをしてやらなくては。チェスターが幸せで当たり前の子ども時代を過ごして欲しいと、とても願っている。当然、子どもたちのものである、人類誕生以来の、特にどうということもない喜びに溢れる子ども時代を。チェスターのやりたい放題にはしたくないけれど、精神的にも肉体的にもチェスターにふさわしくて、大人になってから良い思い出となるような子ども時代を送らせてやりたい。チェスターは急激にしゃべれるようになってきている——そして文章をつなげられるようになって、つなげる時には、とてもおかしな誇らし気な口調になる。今までのところ、話はとても具体的なことばかり——抽象的なことは何も言わないし、理屈っぽかったり思案したりするところはどこにもない。

チェスターはとても愛情深く、とても愛らしい癖がある。わたしの膝のところに寄って来て、ぼちゃぼちゃした手でわたしの頬をそつと撫で、とても可愛らしい声で「おかあしやん——かあしやん、かあしやんの坊やだよ」と言う時には——もう、もう、心に押し寄せる喜びに、母親である素晴らしさをつくづくと思ひ知らされる。息子からお母さんと呼ばれたら、誰だって自分が女であることを神に感謝しないではいられない。

おお、可愛い坊やを愛しすぎているのだろうか？ あの恐ろしい八月二三日⁽⁸⁾以来、愛しすぎているのではないかと時々恐くなる——罰が当たるのではないかと。聖書にも「あなたには、わたしをおいて他に神があつてはならない。」⁽⁹⁾と、あるし。それはほとんど本能的な不安だった。その意味では、聞き耳を立てている霊が、子どもが愛されていると思つて子どもに危害を加えたり病気にしたりすることがないように、縁起の悪い名前を付ける異教徒と大差なかった。神様を前にしても、チェスターを愛していない振りなんかできなかった。チェスターがえくぼのある顔を紅潮させて寝入っているのを見ると、あの子に寄せる想いが募つて、胸が苦しくなるほど。でもベルギーでは、チェスターのようにに愛らしくて大事な子どもたちも、無残に殺されたり見捨てられて死んだりしている。ああ、母親になることは恐ろしい——母親であることは恐ろしい！ 最近デニソンの『リツパ』⁽¹⁰⁾を読み直した。こんなこと、よくも人が書けたものだ。母であることの辛さと悲しみがすべて込められている。わたしは昔デニソンを読んで辛いと思つたことがない、と言つたけど、それは母親になる前のこと。今は『リツパ』を読むと身を引き裂かれる想いがする。この間の晩、『リツパ』を読んで、部屋の中を歩き回り、さめざめと泣いた。わたし自身が、赤ん坊の骨を拾い集め教会の壁の側に埋めた、あの母親になった気がした。リツパの想ひ、リツパの悲しみがわたしに憑依⁽¹¹⁾り、わたしは身をよじつて悲しんだ。

一九一五年三月一九日 金曜日

オンタリオ州、リースクデール、牧師館

最近とても忙しいし体調が悪い。けれど、文句は言わない。それどころか、ある意味、とても喜んでもいる。だって、また赤ちゃんができたのかも知れないから。とてもありがたいことだし、嬉しい——でも、赤ちゃんをまた亡くすの

ではないかと怯えてもいる。その不安が夜も昼もわたしの頭から離れない。

来る日も来る日も絶え間なくやってくる吐き気を、毎日のお務めだと思つてありがたく我慢しているけれど、だからと言つて、生きていくことが辛くなくなるというわけではない。やらなければならぬことがたくさん——世話を焼かなければならぬことがたくさん——全部を辛さも見せずにきちんと片付けるようにしなければならぬ。去年の冬のように悪阻がある。あと何週間かは続くと思う。妊娠と気づく前に、教会青年部の連中を訓練して、夜の集まりの時にちよつとした劇を演じさせるという難儀な仕事に取りかかつてしまった。こうなったら、逃げ出す口実がないから、やり抜くしかない。それで、練習のある晩は歯を食い縛つてもやらなければならない。

(後ろ一段落省略)

一九一五年四月二一日 日曜日
オンタリオ州、リースクデール

(前一五段落省略)

今晚、みんなでチェスターのお祈りのことで大笑いした。タベ初めてチェスターに「よい子にしてください。」という、あの、お願いで終わるお祈りを教えた。今夜チェスターはお祈りを一人ですと言ひ張り、勝ち誇つたように「神様、廊下の物入れの中でも、よい子でいさせてください。」で終わらせた。

廊下の物入れは、チェスターが悪さをすると、お利口になると約束するまで時々閉じ込められる場所だった。チェスターは、神様もわたしと同じ方法で自分をよい子にするのだと思つているのだろう！

一九一五年八月二三日
オンタリオ州、リースクデール、牧師館

今日で、ヒュー坊やを死産して丸一年になる。ああ、思い出したくもないあの日！ いつか、この辛さを忘れることができるのだろうか？ この一〇月に、あれがまた繰り返されるのだろうか？ こんな想いがいつも付きまとつてゐる。

最近ひどい鬱に陥っている——タベの状態は本当にどうしようもなかった。この精神状態——戦況——お天気——東になって襲われると、気分がひどく落ち込んでしまう。時々すっかり気が滅入ってしまうので、チェスターがいなかったら、とても生きていけない気がする。

一九一五年九月一〇日 金曜日

もう我慢の限界。また虫歯で酷い目に遭つてゐる。そしてチェスターのことでとても気が揉んでいる。この間の日記以来、チェスターの体調は一進一退を繰り返している。今はちよつと良さそうだけど、顔色がとても悪くて痩せたので心配。わたしはと言えば、何時も身体がままならない。また元気になるのだろうか！ そんなこと、とても無理、という気がする。

一九一五年一〇月三日 土曜日
リースクデール、牧師館

今日は一日中起きていられる。すべてが終わつた。それも上首尾で——三人目の可愛い坊やが生まれた。坊やは一〇月七日の午後、予定日より一〇日早くやつて来た。ギリシャのコンスタンティンのおかげかも——そうでないかも。何もかも上手くいったので、出産前のあの身体を動かすのも大儀な日々が一〇日間減つたのはありがたかつたけど、まだ看護婦が来てなかつたので慌てた。けれども、当座はシア医師がアックスブリッジの看護婦を連れて来てくれて、夜にはバーナード看護婦がやつて来た。

ユアン・ステュアート・マクドナルドは、体重一〇ポンドのぷっくりと丸々太つた赤ちゃん。お産はとても楽で、赤ちゃんの元気な泣き声を聞いた時、何と嬉しかったことか。女の子が欲しいと思つてたけど、今は千人の女の子とだつて取り替える気はない。そしてチェスターに弟ができて嬉しい。生まれた赤ちゃんは、チェスターとはちつとも似ていない。ステュアートはわたしの方の系統を受け継いでいると思われている。目は確かにわたしのお父さんに似ている。ステュアートは赤ん坊としては手がかからず元気がいい。生まれて三〇分も経

たないうちに、看護婦が抱き上げると、坊やは、突然、頭を持ち上げて、大きく見開いた明るい目で一瞬、部屋をぐるっと見渡した。わたしは、あの、らしからぬチビちゃんの表情を忘れることはないだろう。ちっちゃな白い顔に目が黒く見えて、自分が生まれ落ちたこの見知らぬ世界を、そんな風に探っていた。

ユーアンは、赤ん坊をステュアートと名付けた——大学時代の知人のステュアートという人に因んで。わたしはその名前が好きじゃなかった。シドニーと名付けたかった。でもユーアンは、チェスターの時にわたしが名前を選んだのだから、今回は自分の番だと考えている様子だった。で、わたしは譲った。子どもたちのどちらかが父親の名前を受け継ぐものだと思ったので、ステュアートという名前にユーアンを加えた。とは言っても、ユーアンという名前は、わたしの好きな名前とはほど遠かったし、ユーアン自身もその名は好きではなかった。

そうよ、わたしは幸せで感謝してた。だけど、産後は何かと思わしくなかった。戦況はずっとよくなかった。セルビアは侵略され、新聞には毎日気の滅入るような特電がいっぱいだった。付き添いの看護婦があまり気に入らなかった。本心嫌いという訳ではなかったけど、どうしようもなく頭が悪くてぐずぐずしていた。寂しさのあまり胸が痛くなるほどだった。チェスターが生まれた後の、あの楽しかった頃とは大違いに思えた。でもありがたいことに、可愛いヒューがやって来て——去っていった去年のあのぞっとするような時とも大違い。

初めてあの胸の疼きが消えた。でもこの赤ん坊が可愛いヒューのいなくなった場所を埋めてくれるって人は言うけれど、そんなことはない。誰も埋めることなんかできない。ヒューには何時だつてヒューの場所がある——わたしにとつて永遠に赤ん坊である、あの可愛い影のような赤ん坊——兄弟から見れば、姿も見えないし声も聞こえない可愛い幻のような仲間。小さなステュアートは、可愛いヒューの死によつて贖われたものなので、二人分大切。でもステュアートにはステュアートの場所がある。ステュアートにはあの小さくて冷たい蠟のような遺体が安置されているあの場所を埋めることはできない。

一九一六年一月三日 月曜日

オントリオ州、リースクデール、牧師館

新年は、心配事やら不安やらで、やりきれない気持ちを抱えたまま明けた。チェスターは一二月中風邪をひいて胃腸をこわして散々だった。クリスマス頃、首のところの腺が腫れて、この前の金曜日にお医者さんに来てもらった。医師は深刻な顔をして結核性の腺病かもしれないと言った！チェスターが最近までとても丈夫で元気だったので、そんなこと信じられない。でも、心配で死にそう。ユーアンもわたしも金曜日の夜は一睡もできなかった。

でも、やるべきことは闘うこと——徹底的にそして素早くチェスターの抵抗力をつけること。チェスターの生命力でもって取りついている病気をやっつけるように。結核だつて！そう考えると、わたしの魂は苦痛のあまり縮み上がる。寝ても覚めてもその考えが付きまとう。大事な大事なチェスター、生まれて以来わたしの心の中心を占めている——わたしの長子。(後略)

一九一六年二月二日 火曜日

オントリオ州、リースクデール、牧師館

昨夜、とても変な夢を見た。その夢が残した印象を振り払うことができない。とても鮮明で、とても真に迫っていて、とても変なことに、一端、目が覚めたのに、後でその夢の続きを見た。

昼で、わたしは部屋の化粧台の脇に立っていた。外は太陽が照つて夏景色だった。突然——いや、忽ち——空が墨のように真つ暗になり、どしどし降り雨が降つてきて、雷が鳴つて、稲妻が次々に閃いた。びっくりしたけれど、しばらくの間たじろぎもせず立っていた。次に宇宙を引き裂かんばかりの轟音と大閃光。家に雷が落ちたと思つた。恐ろしさの余り、わたしは悲鳴を上げながら階下に駆け降り、ユーアンの名を呼びながら廊下を走り抜けた。ユーアンも同時に厩から駆け戻つてきて、二人は台所で鉢合わせをし、恐怖のあまり互いに手を取り合った。二人で玄関の方に戻つたとき、男が門から駆け込んで来るのが見えた。わたしが玄関の戸を開けると、男は土砂降りの雨の中から飛び込んできた——軍服姿の兵士が。

この瞬間に赤ん坊の泣き声で目が覚めた。目が覚めた瞬間、奇妙なことにこの夢が戦争でこれから起こることに関わりがあるのだという確信が閃いた。そして、夢の結末を見ないうちに目を覚ましてしまったのが、とても残念だった。

起き上がつて、おむつを換えてベッドに戻つた。寝入つて過去に無い経験をした——

中断した夢の続きを最後まで見たのだ。嵐が止んだところで、太陽が照って雨粒が若草の上でダイヤモンドのようにきらきら光っていた。世界全体が喜びに溢れて春のようだった。わたしは教会の裏手の丘を下っていた——いや、子どものように踊っていたのだ。頭に白い花の花冠を載せて。家までずつと踊って行つた。とても言い表せないくらい浮き浮きして、はしゃいだ気分だった。そこでまた目が覚めた。

ちよつと不思議だけど。まあ、夢が”本当になつて”嵐が止むなら、嵐が過ぎ去つた後にわたしたちみんな幸せになるだろう。気休めにでも、この夢を覚えておかなければ。

一九一六年二月二八日 月曜日

(前三段省略)

夜中の一時に家に帰り着いた。疲れがひどく具合も悪くて寝つけなかった。土曜日は悪夢のような一日だった。雨風が激しくてひどく寒かった。ユーアンの声は相変わらずだった^⑤。戦況と言え、悪いニュースばかりで、赤ん坊は病気がだった。何よりもわたしが病気で食欲がなく眠れないので、当然のことが起こつた。母乳があまり出なくなつて、わずかながら出る母乳もステュアートは受け付けなかった——わたしが病気になるまで来ずつと。ステュアートはこの三週間ずつと、ただただ、弱る一方。それが何とも痛々しい。坊やは泣きもせず——文句も言わず——ただ小さな眠り籠に横になつて、誰かが坊やの上にかがみ込むと、可愛らしい、哀れを誘うような微笑みを浮かべる。二カ月前よりも体重が減っている。どうにかしなければならぬ。こんなに早く乳離れさせるなんて嫌だ。嫌だけど、わたし自身とても体力が落ちていたので、そろそろ坊やの体調が持ち直さなければ、坊やを死なせることになるだろう。この三日間憂鬱でいらして落ち込んでいた——病気で気力が萎えてもいるけれど、わたしはいつも元気にしていなければ。心配や身体の痛みで夜眠れない。ユーアンがもつと元気だったら！ユーアンの声がまったく出なくなつてしまうのではないかと、とても心配。実際、わたしは今のところ、いろいろな心配事の餌食になつてゐるみたい——戦争のこと、ユーアンのこと、赤ん坊のこと、わたし自身のこと。本当に、これが正に、夢で見た嵐のこと。ああ、フレッドか

パーティー^⑥がいたら——誰でもいいから”同類の友”^⑦がいて、わたしをちよつと元気づけるか大笑いさせて、こんな悩みからちよつと助け出してくれないかしら。

一九一六年三月二日 木曜日
オンタリオ州、リースクデール

(前一段落省略)

呪われた生き物のように、重い気分が毎日を通じている。時々、大声で叫びたくなる。空はどんよりとして薄暗く、寒い。チェスターは、元気よく「ポリ・ウオーリー・ドゥードゥル」を歌いながら家の中を走り回っている。そのへんでこりんな歌は、目下、チェスターの大のお気に入り。今の状況とその歌の繰り返しの部分の落差には気分が悪くなる。ありがたいことに、チェスターは元気で生き生きしている。

赤ん坊も、今日は前より調子が良さそう。月曜日から牛乳を与え始めた。牛乳が体質にとっても合っていて、坊やは、いくつかの点で調子が上向いた。

一九一六年三月一〇日 金曜日
オンタリオ州、リースクデール

今晚、ちよつと不思議な経験をした。今日はきつかった。昨夜は、また大汗をかいて眠れなくなつた、というか、悲観的な気分でも何もかもを思い描かずにはいられなかった。片方の乳房がまた痛くなつたので、また乳腺症になつたなら、とても辛抱できない、と思つた。今日は吹雪が猛り狂つて、手紙が全然来なかつた。毎日、手紙を受け取るのが辛くて堪らない——でも、手紙が来ないのはもつと辛くて堪らない。ユーアンの声は、またひどくなつた——赤ん坊の体調はあまりよくない——何もかもが最悪に思える。心配を払いのける体力もないし、夕暮れになると、神経が突然ずたずたになつてしまふ。昔、キャヴェンディッシュで、神経衰弱を患つた、あの恐ろしい冬以来のこと^⑧。あれこれ悶々と思ひ巡らし、神経をすり減らして床の上を歩き回ることしかできなかった。こんな

ことが二時間続いた。恐怖の眠れぬ夜になると覚悟した。「あの、雪が一面、血に染まっている、という」ヴェルダン^⑧のことを思うと、胸が痛んだ。いつの間にか、わたしの惨めな想いは、すべてヴェルダンに収斂^{しゅうれん}したようだった。あの痛ましい惨状に、身を切られるような思いを、絶えず重ねないではいられなかった。

(後一段落省略)

一九一六年三月二日 火曜日
オンタリオ州、リースクデール、牧師館

先週の月曜日からトロントに一週間行ってきた。ユーアンの声はまだすっかりよくなっているけれど、かなり快復したし、あの、心労に満ちた四週間の後、ちよつとした気分転換が実際必要だと思った。それに、しなければならぬ買い物も一杯あった。だから出かけた。とは言っても、そんな気分ではなかった。

月曜日の戦況はまあまあ——仏軍の戦線はまだ持ち堪^{こた}えていた。わたしと赤ん坊は午後の列車でトロントに行き、ノーマン・ビール^⑨が迎えに来てくれた。わたしはビール家に一週間滞在した。メアリは楽しい人——ヨセフを知る一族——そしてノーマンはとても好人物。楽しい一週間になるはずだったけど、体調が悪かったのですっかり台無しだった。

火曜日は、出版社協会がわたしのために茶話会を開いてくれて、その夜はマクリーランド・グッドチャイルド・アンド・ステュワート社^⑩のマクリーランドさんとグッドチャイルドさんが、わたしの次の本のカナダでの出版について話をするためにやって来た。わたしはカナダでの出版権をこの会社に移すと決めた。これまでカナダの出版社から本を出したことはなかった。ページが全世界での出版権を握っていたから——満足とは程遠い契約だった。わたしはマクリーランドさんに、合衆国での出版権をページ社に与えるつもりだと告げた。すると、マクリーランドさんとグッドチャイルドさんはお互いに顔を見合わせた。会談中、二人はページ社に関しては批判的なことは何も言わなかったけれど、話を向ければ言いたいことは山ほどある、という感じがした。わたしは話を向けなかった。ページがどんな人であっても、競争相手にページをけなす機会を与える気はなかった。ページが、今のところ、出版者としてこちらに不審

を抱かせるような重大な理由を与えない限りは。マクリーランドさんのところの会社は、わたしが信用している人たちの間では評判がよく、二人を信用しても安心だと思う。

新しい本について、明確な取り決めはできなかったけど、この秋にそこからわたしの詩集を出すことが決まった。わたしはずっと詩集が出したかった——特別優れた詩だというのではなくて、単に昔から詩集を出すことが望みだったから。ページは何年か前に、詩は割りに合わないと言つて、にべもなく詩集を出すことを断つた。わたしの小説から稼いだ金額を考えれば、たとえ割りに合わないとしてもわたしのために詩集を出してくれてもいいのでは、と思った。それで、詩集の出版については、ページに配慮する必要はないと思った。

先週、また乳房が腫れて、トロントでの滞在が台無しになった——同じ症状が繰り返した——痛みがあつて、悪寒がして、寝汗をかくて、高ぶった神経が鎮まらなかった。それなのに、午後のお茶を掛け持ちして微笑んでおしゃべりをしなければならなかった。もちろん、欠席するのが分別、というものだっただろう。でも、前もって約束してしまっていたので、わたしを主賓として招き、わたしに会わせようと友人を招待していた女主人をがっかりさせたくなかった。名声は高い身分と同じように、ある種の義務を負わせるもの!!

でも、ちよつとしたお出かけ、それを冬中楽しみにしていたのに、それが全く台無しになって、ものすごくがっかりした。

赤ん坊は一緒にいたけど、とてもお利口で、目に入れても痛くないくらいだった。

あるお茶会で、わたしの本のおかげで、わたしに寄せられたお世辞の中でも最も途方もないお世辞を言われた。一人の婦人がわたしのところにやって来て、「マクドナルド夫人、わたしの幼い娘がどれ程『アン』を好きなのか、お話ししたいのです。この間、娘が『緑の切妻』を読んでいるのを見つけて、『おやおや、お前、いったいその本を何回読んでいるの。』と聞いたんです。娘が言うには、『お母さん、分からないわ。聖書と一緒に置いておいて、毎日聖書とアンを一章ずつ読んでいるの。』と、答えたのです。」

若かりし頃、ブロンテやエリオットと肩を並べることを夢見たこともあったかもしれない。でも、どんなにとんでもないことを願ったにしても、聖書と肩を並べることは、絶対思つたことがなかった!!!

でも、正直言つて、一人の子どもの賞賛の言葉の甘さは、今まで寄せられた

賞賛の中で最も心とろかすものだった。

昨日帰宅して、今日一日、片づけをして過ごした。今晚とても疲れた。疲れ
たよりもっと悪いことに、乳腺炎のせいで神経が立つて落ち込んでいる。ユー
アンの声はずっと良くなった、まだいつも通りではないけれど。ヴェルダンへ
のドイツ軍の砲撃は、まだ激しいけれども、今までのところ、進軍はしていな
い。現在、戦闘は死者の丘——ある予言者によって、そう名付けられた——
と、三〇四高地の周辺で行われている。酷い殺し合いが行われているけれども、
仏軍のスローガンは「ドイツ軍は通すものか」だ。

この間、新聞で恐ろしい文を読んだ。それに悩まされている。夜、眠れない
とそのせいで魂が引き裂かれる気がする。「ポーランドでは八才以下の子どもは
みんな死ぬ。子どもたちは、みんな飢えと戦火に曝されて死んだ。」

これが、キリスト暦一九一六年の出来事だ！

一九一六年三月三日 木曜日

オントリオ州、リースクデール、牧師館

このところ、寝汗がひどい。乳腺炎が慢性化したみたい。ひどい睡眠不足で、
とても憔悴してしまった。今、一〇九ポンドしかない。今まででこんなに痩せ
ていたことはない。ここ六週間で二六ポンド減った。

ユーアンの状態もあまりはかばかしくない。でも、赤ん坊は雑草のように遅
く育っている。

『日記抄』原註・訳註

註は、原書の註、訳註を区別せず出現順に並べてある。原書の註は*で示した。なお、原
書では別の箇所につけられている註を、今回訳出した部分の註として転用したものは**で
区別した。その他、註に関する説明は、『モンゴメリの日記（一―十）』を参照されたい。

(1) 【ケイト】 モンゴメリの異母妹。モンゴメリの父が一八八七年に再婚したアン・マクレーとの間には二
男一女があり、上からケイト、ブルース、カール、アイラ・メイ。父は一九〇〇年一月一
六日にアン・マクレーは一九〇九年に亡くなっている。

* 【カール】 ヒュー・カール・ライル・モンゴメリ、一八九三年まれ。ヒュー・ジョン・モンゴメリと
その二番目の妻メアリー・マックレーの息子。

(2) 【「わたしだっただけ……ならば。」】 ウォルター・スコット（一七七一―一八三二）作『湖
上の美人』四章十節『アンの娘リラ』の第五章で、リラは、兄が入隊した時に、こ
の部分を用いている。

(3) 【メティスの反乱（二八八四―一八八五）】 ルイ・リエルの反乱のこと。メティスは原住民と開拓
民である白人との間の子どもを指す。ルイ・リエル（一八四四―一八八五）。

** 【志願兵】 一八八五年、志願兵とプリンス・アルバートの騎馬警衛隊で構成された、合わせて九五名
の団は、リエルとデモン率いる反乱軍と闘うため、ダック・レイクに進軍した。うち、
十名が戦死し、十一名が負傷した。『日記抄』二八九年五月二四日の註。）

* 【バトゥーシユ】 現在のサスカチュワン州にあるメティスの集落。今はノース・ウエストの反
乱と呼ばれている武装蜂起において、一八八四年七月一日からミドルトン將軍の軍
隊（ヒュー・ジョン・モンゴメリが志願兵として参加していた）が、メティスを鎮
圧した一八八五年五月二日まで、ルイ・リエルの本拠地だった。

(4) 【「血を流すこと無しには、罪の許しはあり得ないのです。」】 ヘンリー・ワグネルの手紙 九章二節。

(5) 【「二京の太陽の暗々たる光の中の／不毛な蟻の戦い」】 テニス（一八〇九―一八九二）の
『Mastress』からの引用。モンゴメリは、"trouble"を間違えて"struggle"と
している。

訳者補註【二京】 一兆の上の単位。

(6) 【ビリー・サンデー】 （一八六二―一九三五）アメリカの長老派系の信仰復興運動の説教者、説教壇
での派手な行動で独自の原理主義的福音神学に何百万人の人を改宗させたことで評
価されている。

** (7) 【ゼファア】 リースクデールの北西一〇キロの所にある、小さな開拓地。一八五〇年代前半
開拓され、鉄道が通った一八八〇年代に村は大きくなった『日記抄』一九二二年一
月一八日。『モンゴメリの日記（十）』註(1)参照。

(8) 【あの恐ろしい八月二三日】 次男ヒュー・アレクサンダーを死産した日。『モンゴメリの日記
（十）』参照。

(9) 【「あなたには、わたしをおいて他に神があつてはならない。」】 出エジプト記 二〇章三節。
(10) 【「リツバ」】 テニスの詩。正式に埋葬するために絞首台から息子の骨を拾い集める、ある
母親のモノローグ。

訳者補註 サムエル記下 二二章を題材にしている。リツバはサウルの妾、サウルがギブオン人

を殺戮した結果、飢饉が起きたとされたために、その償いとして二人の息子をつるし首にされ、その死体の番をして鳥獣から守り通し償いを成就させた。

- (11) 【この間の日記】 八月三日の日記は未公刊。

*** (12) 【ギリシャのコンスタンティン（八六八―一九三三）】 ギリシャ国王。在位（一九一三

―一七、一九二〇―一九三三）。『日記抄』一九一五年九月（四目）

- (13) 【シドニー】 『日記抄』第三巻、一〇三頁参照。

- (14) 【結核】 モンゴメリは母親、リアンダー伯父の最初の妻とその子どもたち、親しかった従姉のペンジーなどを結核で亡くしていた。

- (15) 【ユーアンの声は相変わらずだった】 ユーアンは二月九日には咳がひどく、気管支炎ではな

- いか、ということが書かれているが、いつからかは不明である。

- (16) 【フレッドがバーティ】 フレッドは母方の伯母アニー・キヤムベルの三女。詳細は『モンゴメリの日記（七）』参照。バーティは父方の叔母メアリ・マッキンタイアの娘。バーティは一九一四年にモンゴメリ一家と一緒にケンタッキーの鍾乳洞まで自動車旅行をしている。

- (17) 【昔・・・以来のこと】 一九〇九年冬、モンゴメリは乳ガンを疑って悶々としたことがある。

*(18) 【ヴェルダン】 フランスの北東部、「ドイツ」国境近くのロレーヌ地方を流れるムーズ川沿いにある古都。一九一四年のドイツ軍の侵攻にも陥落しなかった要塞都市。一九一六年、皇太子配下のドイツ軍が激しい砲撃を浴びせた。

- (19) 【ノーマン・ビール】 ノーマン・ビールは、モンゴメリの第一従妹メアリ・キヤムベルの夫。メアリ・キヤムベルはプリンス・オブ・ウェールズカレッジ時代、モンゴメリと同じ下宿に住んで一緒に通った。

*(20) 【マクリーランド・グッドチャイルド・アンド・ステュワート社】 この、モンゴメリのカナダでの出版社は、一九〇六年にジョン・マクリーランドとフレデリック・グッドチャイルドによって創立され、一九一四年にジョージ・ステュワートが経営に参加した。一九一八年、グッドチャイルドが経営から降り、当時、アデレード・ストリート西四二番地にあった会社の名前は、マクリーランド・アンド・ステュワート社になった。

この論文作成にあたり、翻訳の承認だけでなく、貴重な情報と示唆と励ましをいただいた『日記抄』編者のメアリ・ルビオ博士とモンゴメリ研究所のエリザベス・エパリー博士、ならびに、ゲルフ大学図書館公文書及び特別文庫部門のスタッフの方々に感謝の言葉を捧げる。

The Journals of L. M. Montgomery (11)

– The birth of Ewan Stewart Macdonald–

TAKEUCHI Motoko, IZAWA Yuko, and FUJIKAKE Yumiko

Montgomery gave birth to her first child, Chester Cameron Macdonald, on July 7, 1912. When she was expecting her second child in 1913, she hoped it would be a girl. However, it turned out to be a boy. To make matters worse, he was stillborn. Deeply depressed by the loss, she felt completely shattered. She had really wanted another child: a brother or a sister for Chester. Nevertheless she was afraid she might be too old to bear another. At the same time, she was frightened that she might undergo a similar dreadful experience.

What with the stillbirth of her second son and the outbreak of the First World War, Montgomery was extremely disturbed in 1914, yet she wanted to have another boy or girl. On Oct. 7, 1915, she All these fears and pains accumulated to inspire her novel, *Anne's House of Dreams*.

Keywords: Pregnancy, Distress

Permission

Permission to translate and publish entries from L. M. Montgomery's journals has been given by Mary Rubio and the University of Guelph. Entries are taken from *The Selected Journals of L. M. Montgomery*, ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston, published by Oxford University Press (Canada), copyright 1987-2005 by the University of Guelph. Permission granted courtesy of the L. M. Montgomery Collection, Archival and Special Collections, University of Guelph Library.

翻訳許可

モンゴメリの日記の抜粋箇所の翻訳はメアリ・ルビオ、ゲルフ大学により承認済み。抜粋は、1987年から2005年にかけてゲルフ大学が著作権を取得した、メアリ・ルビオ、エリザベス・ウォーターストン編、カナダ・オックスフォード大学出版局出版の『L・M・モンゴメリ日記抄』収録。ゲルフ大学図書館公文書及び特別文庫部門L・M・モンゴメリ文庫の厚意により承認済み。

参考・引用文献

L. M. Montgomery *The Selected Journal of L. M. Montgomery vol. I: 1889-1910*

Mary Rubio & Waterston ed. 1985 Oxford University Press

『L. M. モンゴメリの日記 I (1889-1894)』 桂宥子訳 1989 篠崎書林

『モンゴメリ日記① (1889-1892) / プリンセス・エドワード島の少女』 桂宥子訳 1997 立風書房

『モンゴメリ日記② (1893-1896) / 十九歳の決心』 桂宥子訳 1995 立風書房

『モンゴメリ日記③ (1897-1900) / 愛、その光と影』 桂宥子訳 1997 立風書房

L. M. Montgomery *The Selected Journal of L. M. Montgomery vol. II: 1910-1921*

Mary Rubio & Elizabeth Waterston ed. 1987 Oxford University Press

L. M. Montgomery *The Selected Journal of L. M. Montgomery vol. III: 1921-1929*

Mary Rubio & Elizabeth Waterston ed. 1993 Oxford University Press

- L. M. Montgomery *The Selected Journal of L. M. Montgomery vol. IV: 1929-1935*
Mary Rubio & Elizabeth Waterston ed. 1998 Oxford University Press
- L. M. Montgomery *The Selected Journal of L. M. Montgomery vol. V: 1935-1942*
Mary Rubio & Elizabeth Waterston ed. 2004 Oxford University Press
- L. M. Montgomery *The Alpine Path* 1917 *Every Woman's World* June to November
『険しい道』 山口昌子訳 1979 篠崎書林
- L. M. Montgomery *My Dear Mr. M: Letters to G. B. Macmillan*
Francis W. P. Bolder & Elizabeth R. Epperly eds. 1980 Ryerson Press
『モンゴメリ書簡集 I』 宮武潤三・順子訳 1981 篠崎書林
- L. M. Montgomery *Green Gables Letters: 1905-1909, from L. M. Montgomery to Ephraim Weber*
Wilfrid Eggleston ed. 1960 2nd edition 1981 Ryerson Press
- L. M. Montgomery *The Annotated Anne of Green Gables*
W. E. Barry, M. A. Doody, M. E. Doody Jones eds. 1997 Oxford University Press
『完全版 赤毛のアン』 山本史郎訳 1999 原書房
- Douglas Baldwin *Land of the Red Soil: A Popular History of Prince Edward Island* 1991
Ragweed Press 『「赤毛のアン」の島』 木村和男訳 1995 河出書房新社
- Francis W. R. Bolger *The Years before "Anne"* 1974 Prince Edward Heritage Foundation
- Elizabeth Epperly *The Fragrance of Sweet-Grass: L.M.Montgomery's Heroines and the Pursuit of Romance*
1992 University of Toronto Press
- Mollie Gillen *The Wheel of Things* 1975 Fitzhenry & Whiteside
『運命の紡ぎ車』 宮武潤三・順子訳 1979 篠崎書林
- Margaret H. Mustard *L. M. Montgomery as Mrs. Ewan Macdonald of Leaskdale Manse 1911-1926*
1965 Leaskdale
- M. Rubio & E. Waterston *Writing A Life: L.M. Montgomery* 1995 ECW Press
『<赤毛のアン>の素顔』 M. ルビオ・E. ウォーターストン 榎朝子訳 1996 ほるぷ出版
- Harold H. Simpson *Cavendish, Its History, Its People* 1973 Truro

The Canadian Encyclopedia 1995 McClelland & Stewart

齋藤勇 監修 『英米文学辞典』第3版 1985 研究社

- 伊澤・藤掛・竹内・伊藤 『モンゴメリの日記について』 1996 宮城学院女子大学研究論文集 84号
- 伊澤・藤掛・竹内・伊藤 『モンゴメリの結婚観』 1997 宮城学院女子大学研究論文集 86号
- 伊澤・藤掛・竹内 『「緑の切妻のアン」のモデルを考える』 1999 宮城学院女子大学研究論文集 89号
- 伊澤・藤掛・竹内 『作家モンゴメリ』 2000 宮城学院女子大学研究論文集 91号
- 伊澤・藤掛・竹内 『L. M. モンゴメリは友人に何を求めたか』 2002 宮城学院女子大学研究論文集 95号
- 奥田実紀 『「赤毛のアン」の庭で』 1995 東京書籍
- 奥田実紀 『紀行「赤毛のアン」』 1996 晶文社
- 竹内・伊澤・藤掛・伊藤 『モンゴメリの日記 (一)』 1996 仙台電波工業高等専門学校紀要 第26号
- 竹内・伊澤・藤掛・伊藤 『モンゴメリの日記 (二)』 1996 仙台電波工業高等専門学校紀要 第26号
- 竹内・伊澤・藤掛・伊藤 『モンゴメリの日記 (三)』 1997 仙台電波工業高等専門学校紀要 第27号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (四)』 1998 仙台電波工業高等専門学校紀要 第28号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (五)』 2000 仙台電波工業高等専門学校紀要 第30号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (六)』 2000 仙台電波工業高等専門学校紀要 第30号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (七)』 2003 仙台電波工業高等専門学校紀要 第33号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (八)』 2003 仙台電波工業高等専門学校紀要 第33号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (九)』 2005 仙台電波工業高等専門学校紀要 第35号
- 竹内・伊澤・藤掛 『モンゴメリの日記 (十)』 2006 仙台電波工業高等専門学校紀要 第36号
- 横川寿美子 『「赤毛のアン」の挑戦』 1993 宝島